

# 近世イギリスにおけるイスラーム観と他教派観 —捕虜と再改宗を例に—

河底 佑佳

## 1. はじめに

近世イギリスにおけるイスラームとの接点は、とりわけ 1630 年代について「貿易が強化され、学問的アラビア語がオックスフォード大学とケンブリッジ大学で確立され、訓練された通訳と外交関係を扱う素養を与えられた役人が輩出され——その一方で海賊行為は衰えず継続された」<sup>(1)</sup>と形容されるように多面的である。すなわち一方では 1580 年にオスマン帝国スルタンによってイギリス人に与えられた同帝国内における商業活動の許可が貿易を活発化させ、同時期からいくつもの貿易会社が設立されたことに伴い交易の範囲が拡大した。その結果、イギリスは世界中の様々な地域でイスラームと接触し、とりわけ北アフリカのオスマン帝国摂政管区におけるイスラームとの遭遇において海賊行為と捕虜の問題が生じた。他方、ヨーロッパ諸国に遅れを取りつつも 1630 年代にはオックスフォードとケンブリッジ両大学にアラビア語講座が設置された。上記のような動向を背景として、17 世紀半ば、イスラームはイギリス国内においてキリスト教諸教派の一部、あるいはキリスト教と同等の宗教として記述されることとなる。

キリスト教とイスラームを並列した言説が見られ始めるのは、1640 年代から衆目を集めた、キリスト教の諸異端をカタログ化したパンフレットにおいてである。異端のカタログは、「安価な大衆向けパンフレットと学術的な神学的論争書のふたつの領域にまたがる文学形式」であると仮定される<sup>(2)</sup>ように、無名のパンフレット作成者によって出版されたものから聖職者たちが出版したものまで幅広く存在した。パンフレットの内容は当時の数十以上の異端的教派の名称とそれら諸教派の異端性の列挙であり、異端に対する描写としては一般的であり特筆すべき点はないと指摘されている<sup>(3)</sup>。だが、それらキリスト教の異端としてカタログ化されたものの中にマホメタン<sup>(4)</sup>（イスラームに対する 17 世紀頃の一般的呼称）を挙げたものがあることは注目に値する。1641 年に無名のパンフレット作家によって出版された『ロンドンにおける 29 のセクトの発見 (*A Discovery of 29 Sects here in London*)』では、ピューリタン、パピスト（ローマ・カトリックに対する蔑称）、長老派、ルター派、再洗礼派などと共にイスラーム（Mahometans）の項が立てられた。

諸異端に対する辞書的記述の一極として現れたのが 1653 年、イギリス国教会聖職者であるアレキサンダー・ロスによって記され、世界の全ての宗教が通時的・事典的に纏められた『パンセベシア——あるいは世界中の全ての諸宗教の概説—— (*Pansebeia: or, A View of All the Religions in the World*)』である。同著は 17 世紀における 6 度の再版を経て 18 世紀まで読み継がれたが<sup>(5)</sup>、イギリス国教会以外の諸教派・宗教を誤ったものであるとして批判する<sup>(6)</sup>点においてキリスト教諸異端をカタログ化する潮流の一部に位置付けられる<sup>(7)</sup>。

ロスはこの著作においてイスラームをキリスト教とユダヤ教の両方の要素を併せ持つ、正しい宗教と誤った宗教との中間に位置するものとして捉えており、またキリスト教と共

にヨーロッパにおいて広く普及している宗教として描写する<sup>(8)</sup>。イスラームに関する記述は次のように始まる。「問。今日ヨーロッパで普及している 2 つの宗教は何であろうか。答。マホメタニズムとキリスト教である」<sup>(9)</sup>。前記の問答が記された後にイスラームの儀礼、諸教派、イスラームが世界に根付いた理由などの、より詳細な解説が加えられてゆく。すなわち、17 世紀イギリスにおいて幅広く読まれた諸宗教の比較記述の一つにおいて、イスラームはヨーロッパにおいてキリスト教と並び立つ存在であり、イギリス国教会には及ばないまでもキリスト教諸異端と比肩しうる一宗教として描写されるに至ったのである。

本稿の目的は、17 世紀イギリスにおいて、なぜイスラームがキリスト教諸教派の一部、あるいはキリスト教と同等の宗教として記述され得たのか、すなわち、キリスト教と等置される一宗教としてイスラームが認知されるようになった経緯の一端を明らかにすることである。そのため本稿では、オスマン帝国のイスラームとの接触、特に 16 世紀から 18 世紀にかけて海賊の港として栄えたチュニス、アルジェ、サレなどが含まれる北アフリカの沿岸部バーバリー（バルバリア、Barbary）を本拠地としたバルバリア海賊によるイギリス人捕虜と彼らの信仰の動揺に着目し、虜囚下でイスラームへと改宗したキリスト教徒がイギリス国教会へと再改宗する際に行われた諸説教に焦点を当てる。そして、それら説教を通じて当時のイギリスにおいてイスラームに対するいかなる言説が存在したのかを示し、そうした言説がいかなる理由によって展開されたのかを当時のイギリス国教会の置かれた状況との連関の中で論じ、一宗教としてのイスラームが立ち現れた原因を考察する。

本論に先立って、論文内で用いるいくつかの語を整理しておきたい。まず本稿では、ブリテン島全体を指してイギリスという呼称を用い、特に断りのない場合はイングランドの国教会を指してイギリス国教会あるいは国教会という語を用いる。Turks という語については、オスマン帝国の脅威がイスラームやムスリムの脅威に接続されてイスラームが Turkish Religion と呼ばれてきた背景を踏まえ、文脈によってこの語をトルコ／トルコ人、イスラーム、ムスリムといった語に訳し分けた。また、再改宗とはキリスト教徒が一度イスラームに改宗した後、再びキリスト教徒となることとする。

## 2. 捕虜をめぐるイギリスとイスラーム—バルバリア海賊の脅威とイスラームへの改宗—

ガリオン船の導入によって 17 世紀初頭までに航海技術を刷新し活動範囲を拡大したバルバリア海賊は、イギリスでは 1603 年にジェームズ 1 世が即位して以来、イギリス海軍の弱体化やスペインとの和解を重視した政策とが相俟って、イギリス全土を脅かした<sup>(10)</sup>。1609 年から 1616 年の間には 466 隻のイギリス船がムスリムの海賊によって襲われ、乗組員が捕虜となった<sup>(11)</sup>。ジェームズ 1 世はこれらの海賊行為に対する警戒と、イギリス人がムスリムによって捕虜とされていることに対する抗議を 1615 年と 1617 年オスマン帝国に申し入れたが事態は改善されなかった。

バルバリア海賊による略奪は激しく、17 世紀前半だけでも海上で拿捕されたイングランド所属の船は 400 隻以上、捕虜となった人々は 8,000 人を超えるとの推計を挙げた研究も存在する<sup>(12)</sup>が、ブリテン諸島に上陸しての襲撃を含めれば、膨大な数のイギリス船とキリスト教徒が捕虜とされたと言いうる。こうした海賊行為の増加は、イギリスにおいて捕虜解放のための交渉と身代金の捻出<sup>(13)</sup>という外交上の問題のみならず、新たな宗教的問題をも惹起した。すなわち、バルバリア海賊の捕虜となった者たちのキリスト教からイスラームへ

の改宗である。

バルバリア海賊によって拿捕されたキリスト教徒たちの多くは、キリスト教徒の捕虜がムスリムの奴隷として売買される中心地であったアルジェに連れ去られた。捕虜たちのうちスルタンの目に適う容姿の女性のみがコンスタンティノーブルに送られ、何らかの方法で身代金を払い得たわずかな者のみが解放され、他の多くの者たちは市場で家畜と同様に競りにかけられ、ムスリムの役人や私人に売られていった。

キリスト教徒の奴隷の境遇はその奴隷の売られた先での待遇によって様々であったとされる<sup>(14)</sup>。捕虜の中から過酷な労働に耐えうるであろう者が 8 人に 1 人の割合で総督に選ばれ、アルジェの総督府所有の奴隷となり、残りの者は身体能力などの検査を受けた後、総督の館で他の買い手に売られた。

上記のような過程で起きたのが、イスラームへの改宗である。例えば 1637 年にムスリムの海賊によって海上で拿捕されアルジェで奴隷として売られた後、イスラームに改宗したイギリス国教会の信徒ヴィンセント・ジュークスによる体験は次のように語られる。

この旅において彼らはトルコ<sup>1</sup>の海賊に襲われた。そして危険な目にあった後、そこで 7 人が殺されおおよそ 20 人以上が傷を負い不具となった。彼と 33 人以上の者たちはアルジェへと運ばれ、そこで、到着してから 4 日以内のうちに、彼らは市場で奴隷として売られた。その一行のうち多くの者が死に、4 人は解放され、7 人は奴隷の状態にとどまった。売られることになる 8 人毎に王が好みの者を選ぶのがその土地の慣習であった。そしてこの男〔ジュークス〕は 8 人のうちの 1 人となった。それで王は彼を自分の奴隷とし、2 ヶ月後、彼を自分の兄弟に譲り渡した。その王の兄弟によって、彼はニグロに売られた。ニグロは彼を最も無情に扱った。日々の脅しとひどいむち打ちによって、彼にキリスト教を捨て、キリストを否定し、マホメットを偉大な預言者として認め、その信仰の証に割礼され、トルコの儀礼と服装に従うことを強いた。これらすべてのことが成し遂げられ、ニグロは彼を、やはりマホメタンであったギリシア人に売った。<sup>(15)</sup>

以上はジュークスがムスリムの手から逃れ、イギリスに帰国して再びキリスト教徒となることを願い出た時、彼の再改宗が認められる場で行われた説教において語られた奴隷売買とイスラームへの改宗の様子である。ジュークスはアルジェの支配者によって選ばれた奴隷の一人となったが、結果的に政府所有の奴隷たちのような生活を与えられることはなく、別の主人に売られ、イスラームへの改宗を迫られてムスリムとなり、ムスリムの奴隷として使役されることになった。イスラームへの改宗が強要されたというジュークスによる体験は、この語りがイギリス国教会にジュークスが再改宗する際の説教という、キリスト教への信仰の保持が確認される場でなされたためにいくらか差し引いて考えられる必要がある。だが、たとえ改宗の強要についての表現が誇張であったとしても、奴隷として売られるまでに多くの者が傷を負ったこと、売られるまでに多くが死ぬほどの、決して良好とは言えない環境で、改宗に追い込まれるような場面に置かれたことは確かであろう<sup>(16)</sup>。

イギリス国教会はローマ・カトリックのように捕虜の救出のための聖職者集団を組織することはなかったが<sup>(17)</sup>、17 世紀初頭、イギリス人捕虜のイスラームへの改宗を見過ごさなかったことは国教会の動きから読み取りうる。1637 年、当時カンタベリー大主教であったウィリアム・ロードは議会に対して、キリスト教からイスラームへと改宗した者がキリスト

教へと再改宗する際に行うゆるしの秘跡の形式 (A Form of Penance and Reconciliation of a Renegado or Apostate from the Christian Religion to Turcism) を提案した。このゆるしの秘跡は、ほぼ一ヵ月にわたって行われるものであった。第 1・第 2 日曜日には再改宗した改宗者たちが白い衣を纏い、白い杖を持ち教会の玄関に立つ<sup>(18)</sup>。第 3 日曜日には改宗者は教会によって認められるが、司祭からのゆるしが与えられるまでは牧師席の近くに立たねばならない。だが、ロードによって提案された再改宗者のためのゆるしの秘跡は、数年後に起きたロードの失脚とも相俟って大きな影響力を持つことはなかった<sup>(19)</sup>。

### 3. 再改宗をめぐるイスラームに関する言説

#### 3-1 再改宗者の状況と再改宗の説教を取り上げる意義

さて、虜囚の最中でイスラームに改宗した人々の中にはイギリスに帰国した後に自らの改宗を悔い、教区の聖職者にイスラームに一度改宗したことを告白し国教会に再び迎え入れられることを望んだ者もいた。こうしたイスラームからキリスト教への再改宗とも言う事態が発生した例はあまり多くはなかったようであり、教会がそうした再改宗者に言及する例も限られている。というのも、海上の生活を送る人々にとっては信仰の揺れ動きはそう珍しいことではなく、かつ本人の良心が咎めない限りにおいてはイスラームへの改宗を教区の聖職者などに告白する義務はなかったためである<sup>(20)</sup>。以下では、再改宗の際に説かれた説教の内容を取り上げるのに先立って、本稿において国教会に再改宗を申し出たイギリス人捕虜という量的に豊富とはいえない例に着目する理由を明らかにしたい。

1590 年頃から 18 世紀初頭までの間にイギリスに帰国した捕虜たちは、自らの虜囚の記録を出版することがあった。現代においては、これらの捕虜たちによる記録群は「虜囚の物語 (the captivity narrative)」と分類されうる一領域を形成すると言われている<sup>(21)</sup>。とりわけ 1640 年までに出版されたそれら記録の内容は、バルバリア海賊の脅威、奴隷としての労働、イスラームへの改宗に対する抵抗、その後の脱走とイギリスへの帰国を主題としており、これらの記述からイギリス国内の人々はムスリムの軍事的・宗教的強大さとその脅威を認識した<sup>(22)</sup>。捕虜たちによる「虜囚の物語」はイギリスにおける一般的イスラーム観の形成に寄与したという点において重要な記録群である。しかし捕虜たちの記録は、自らがキリスト教の信仰を常に保持していたことに対する対外的弁明の側面を有しており<sup>(23)</sup>、それをもってイギリス国内における宗教状況との連関の中でイスラームを捉えることは困難である。対して、再改宗が教会に申告された例は必ずしも多くはないにしても、そこにおいて説かれた言葉はイスラームに対する正統性の主張のための批判に留まらず、当時のイギリスにおいてどのような教派や宗教的態度が警戒されていたのかといった、キリスト教諸教派を含めた宗教状況をも提示しうる。この点において、再改宗時に行われた国教会聖職者による説教は、自らのキリスト教への信仰が保たれていることを証明するために記された捕虜による記述や、イスラームの武力的脅威に焦点を当てる歴史的記述には提供し難い側面を提示しうる資料である。しかし同時に本節で扱う説教において現れるイスラーム像の背後には、上記のような捕虜たちによる語りの積み重ねが存在することも忘れてはならない。すなわち本節において現れるイスラームに対する批判的見解は、イスラームに対する優位性の誇示という国教会による意図のみならず、捕虜たちによって描かれた強大なイスラーム像や当時の人々による一般的イスラーム観をも反映しているのである。

### 3-2 再改宗に際して説かれた説教とイスラームに対する言説の分類

本稿で取り上げる 3 つの説教は、『アルジェからの帰還 (*A Retvrne from Argier*)』と『背教からの回復 (*A Recovery from Apostacy*)』という 2 冊の文献に収められたものである。前者は、1628 年にロンドンで出版された書物であり、イギリス南西部マインヘッドにて 1627 年の四旬節の第 3 日曜日の午前と午後にそれぞれ行われた、イスラームからキリスト教に再改宗することを望む人物を教会に再び受け入れる礼拝の場で説かれた 2 つの説教が収録されている。説教者は、国教会聖職者で神学博士であるエドワード・ケレットと当時セルワシーの教区牧師であったヘンリー・バイアムである。

『背教からの回復』は 1638 年 10 月 21 日にロンドン東部の地区ステップニーにて、教区牧師補佐であり、ロンドンにおいて説教者として人気を博していたウィリアム・ゴージによって行われた説教を収録したものである。この時、国教会への再改宗を望んだのは 1 章 2 節においてその体験を挙げたヴィンセント・ジュークスである。帰国してからイスラームへの改宗を悔いた彼は、教区の副司祭に相談し、副司祭を通じて彼の事例は主教や当時のカンタベリー大主教ロードの知るところとなった。このことによってジュークスのために先述の再改宗者受け入れのための儀礼が設定され、その場においてゴージによって行われた説教が同著に所収されている。

上記の 3 つの説教におけるイスラームに対する言及は、主としてオスマン帝国の慣習やムハンマドに対する偏見に由来する当時における典型的なイスラーム批判が中心である。しかしながら説教の主題や説教者毎に、イスラームに対する批判を前面に出すか否かには差が生じており、背教者が再び国教会に戻ったことを喜び背教者の内面においてキリスト教への信仰が保たれていたことを強調する『背教からの回復』においてはイスラームへの批判的記述は少ない。そのため以下において示すイスラームへの批判は当時における典型ではあるが、主として『アルジェからの帰還』において見出されるものである。

イスラームに対する批判の論点は次の 3 点に集約される。すなわち①ムハンマドの人間性や行為、②ムスリムの外見、③イスラームの教義である。一点目のムハンマドの人間性や行為については、当時典型的であった誤った教えを世に広めた詐欺師としてのムハンマド像の他に、「マホメットは（私は言う）彼の情婦の強奪者〔であり〕、有名なザイドの姦夫」<sup>(24)</sup>であるといった、複数の妻を娶ったことや姦夫として彼を責める表現がみられる。ここで言及されるザイドはムハンマドの養子であるザイド・イブン・ハーリサを指す。ザイドはザイナブ・ Bint・シャフシュと結婚していたが、後に離婚した。二人が離婚し待婚期間が過ぎてから、かねてよりザイナブに恋していたムハンマドはザイナブと結婚した。17 世紀のイギリスにおいて上記の記述がどれほど正確に知られていたかは定かではないものの、他人の妻に想いを寄せたという点においてムハンマドは「姦夫」と表現されたと考えられる<sup>(25)</sup>。

二点目のムスリムの外見に対する批判は、主としてイスラームの慣習である割礼とオスマン帝国においてムスリムが纏った白いターバンへと向けられる。ターバンは原始教会の時代に自らを異教徒から区別するためにキリスト教徒が纏ったマントや、ユダヤ人が衣服の四隅に房と青い紐を縫い付けることと比較される。ユダヤ人やキリスト教徒の服装は「彼らの実際の服装によって彼らの宗教を公言するための十分な根拠があった。しかしムスリムのターバンは根拠において不快であり、実用において無意味である」<sup>(26)</sup>と述べられる。というのも、白いターバンは頭部に疥癬を患った預言者ムハンマドが見苦しい頭部を隠すために纏ったものであり、ムスリムたちはそれを真似て白いターバンを身に着けると解釈さ

れたためである<sup>(27)</sup>。ムスリムの着衣や慣習への批判はまた、改宗者の過ちを指摘することに結び付く。なぜなら改宗者は「彼が割礼されることに屈し、全ての頭髪を剃り落とされ、トルコ人の服装に身を包み、そして自分自身がマホメタンであると断言した時、その時彼はなくなった」<sup>(28)</sup>、すなわちキリスト教の信仰を棄てたとみなされるのである。

三点目に挙げたイスラームの教義に対する批判は、主に彼らの来世観に関係する。イスラームにおいて信じられる樂園について、ムスリムたちが「浮かれて狂った世界におり、飲食と売春婦たち〔との交わり〕を終わらせない」<sup>(29)</sup>場所であると述べられる。この来世観はムハンマドの提唱した「悪魔的な教義であり、彼が世界を騙し、盲目の人々を地獄の深い穴に導いた奇妙な嘘と強力で誤った信念の一端」<sup>(30)</sup>であると断言されるのである。

イギリス国教会聖職者たちのイスラームに対する理解・表現は、上記のように同時代における一般的なイスラームへの侮辱の範囲内に収まっていたが、これらの説教において注目すべき点は他にもある。すなわちイスラームがこれまで述べてきたような表現によって苛烈に批判・侮辱された場で、同時にピューリタン批判やローマ・カトリックに対する言及がなされている点である。以下ではそれら他教派に対する言説がイスラームとどのように結びつけられたのかを示したい。

### 3-3 再改宗の説教におけるローマ・カトリックへの言及

イスラームへの批判は、再改宗の際に語られた諸説教の中でしばしば非国教会の諸教派への批判・言及と接続する。本項ではまず、反キリストが生まれうる可能性についてローマ・カトリックとイスラームが並列された後にイスラームから反キリストが輩出されたと結論づける、バイアムによる主張に注目したい。

しかし、もしムスリムと教皇が共にその一つの反キリストを作り上げることができないとすれば、彼〔反キリスト〕はそれら〔イスラームとローマ・カトリック〕の両方ではないだろうし、それら両者から出る第三のものでもないだろう。それらと無関係の第三のものでもないとも付け加えておく。むしろ私は、学識あるザンキウス<sup>(31)</sup>と他の人々〔の意見〕でもっておそらく結論をつけるべきだろう。ムスリムが彼〔反キリスト〕である。ムスリムは自分自身を神の預言者であると公言するにもかかわらず、神と呼ばれる全てのものに対抗して自分自身を賛美する、また最も冒瀆的なことに神を否定し、三位一体もその神も、神の力をも認めていない。<sup>(32)</sup>

反キリストについて述べた、「偽り者とは、イエスがメシアであることを否定する者ではなくて、だれでありましょう。御父と御子を認めない者、これこそ反キリストです」<sup>(33)</sup>との聖書の文言に該当する対象として、三位一体を否定するイスラームを当てはめることは容易である。さらにこの説教が再改宗者を受け入れる場において説かれた以上、イスラームを悪し様に言うのは当然であり、ザンキウスらを論拠に挙げるようにイスラームと反キリストを同一視することがバイアム独自の視点ではないことも推測される。そのためバイアムの主張は、従来ローマ・カトリックに対して適用されていた批判をイスラームに対して再適用したにすぎないという見方もありうる。では、ローマ・カトリック及びイスラームに相対したイギリス国教会が上記のような批判を行ったことには単なる批判対象の転換以上の要素を見出すことはできないのであろうか。

その検討を行うためには、当時のイギリス国教会がどのようにローマ・カトリックやイスラームと相対したかを概観する必要がある。17 世紀のイギリスにおいてローマ・カトリックは中世期以来墮落の一途を辿った、既に普遍性を失った教会として国教会によって認知されてきた。対してイギリス国教会が目指したのは、使徒達による原始の普遍的教会を再生し継承すること、すなわち自らがカトリック（普遍的な）教会となることである。イギリスの宗教改革に取り組んだ聖職者たちは、中世においてローマ・カトリック教会は多くの誤りを犯し、墮落してきたとした。例えば聖体拝領の度にキリストの犠牲を反復して、キリストによる犠牲が一度きりであることを否定したり、煉獄という概念を取り入れて信徒を惑わしたことに對して非難が向けられた。さらに、ローマ・カトリックがあらゆる地域でラテン語の聖書と典礼を強要したこと<sup>(34)</sup>も批判の対象となった。しかしながらカトリック教会が有する洗礼と聖餐、主教制（episcopacy）は原始教会にも存在した普遍的なものであるとして、イギリス国教会はこれらを踏襲した。こうしてイギリス国教会は一方ではローマ・カトリックから普遍的要素を取り込み、他方ではヨーロッパで既にその立場を確立していたプロテスタントたちと同様に、聖書の権威を主張した。このローマ・カトリックと大陸のプロテスタントの中間を取る立場は、16 世紀の国教会聖職者リチャード・フッカーによって「ヴィア・メディア（Via Media, 中間の途）」<sup>(35)</sup>と呼ばれる。前記のようなローマ・カトリックの墮落した要素とプロテスタントによる極端な聖書中心主義を取り除いたヴィア・メディアの教会こそが原初の教会の姿であり、目指すべきところであるとイギリス国教会は自己規定したのである。そしてこの結果、イギリス国教会は絶えずローマ・カトリックとプロテスタント諸派の間をとる立場・実践を実現するために奔走し、その帰結の一部としてカトリック教徒ともピューリタンらプロテスタント諸派とも対立を抱えることになった。

普遍的教会の確立を目指す意志は、本説教が行われた時期の国王チャールズ 1 世にも継承されており、国王の意を反映して、当時の親国王的な国教会聖職者たちはローマ・カトリックの儀礼などから形式的・普遍的要素のみを取り入れ、原始の使徒的教会を再現することを試みていた。すなわちローマ・カトリックを全面的に否定することは、少なくとも親国王的な態度をとる国教会聖職者にとっては国王と教会上層部の意に反することであった。上記のような世情の中で、バルバリア海賊によってイギリス沿岸部に接近したイスラームは、とりわけこの説教が行われたマインヘッドのような港町の人々に対して略奪や拿捕という恐怖を植え付けていた。これに加えて本節の冒頭において触れた捕虜による記録が、イスラーム勢力をキリスト教の信仰に対する敵対者として描いた状況下で、一度イスラームに改宗したと告白する者がキリスト教の信仰に対するイスラームの脅威を証明するかのよう国教会の人々の前に現れたのである。

この再改宗者を受け入れる際の説教がイスラームを敵として、誤謬に満ちた憎むべき教えとして批判し、蔑視することを主目的として行われていることは言うまでもない。しかし、先のバイアムの引用のように反キリストの呼称がローマ・カトリックからイスラームへと転換された背景には、国教会がその一部を継承することを試みたローマ・カトリックに対する過剰な批判を差し控える意図を読み取ることができるであろう。説教者バイアムがロードに献呈を捧げようとしたこと、王室のチャプレンとして勤めたことから、彼が親国王的な聖職者であったことが窺われる。したがって、反キリストがイスラームであるという明言には、ローマ・カトリックによる煉獄などの教義を非難しつつも儀礼的にはその要素を取り入れようと試みた当時の国教会によるローマ・カトリックへの一種両義的な姿勢が反映さ

れていると言えよう。

### 3-4 再改宗の説教における原始教会とイギリス国教会の対比

さて、再改宗を申し出てきた人物がとるべき態度を教会側が述べる際には、イギリス国教会と原始教会の類似性が強調されるのも注目すべきことであると思われる。

これを示す例として、改宗は特別なことではなく、改宗者を教会に迎え入れるのは古から行われてきたことであるとして次のように述べられる。

原始教会の時代から我々の時代に至るまで、信仰に背いた後に自分たちの罪への罪悪感に完全に心動かされた人々は、進んで〔誤った信仰を〕撤回し、懺悔し、教会が彼らに課すのに相応しいと考えることを成した。こうしたことは何度も、全ての改革された諸教会において行われてきた。またそれは異教徒やトルコの宗教、ユダヤ教から改宗した人々だけでなく、再洗礼派やローマ・カトリックから改宗する人々によっても行われたのである。<sup>(36)</sup>

改宗はユダヤ教や異教徒、イスラームのような異なる宗教からの移行のみを指すのではなく、キリスト教諸教派からの転向をも指し、教会はどちらの場合に対しても相応の贖罪行為を課してきたというのである。ここにおいて、非キリスト教と今まさに背教者を再び受け入れようとしているイギリス国教会を除くキリスト教諸教派とイスラームは、正統な教会に対する非正統的な信仰として並置されることになる。

なぜなら、その意図が大陸のプロテスタント諸教会そして何よりもイギリス国教会の普遍性を示すためであることは次の引用から明らかになるためである。

我々はこれまで背教の後に悔悟者が教会に入ることを認めるために古代の教会がどのようにして時期、場所、儀礼、聖職者を設けたかを示してきた。このことは背教者のような人々を受け入れることを教会が快諾しており、またその準備ができていたことの明らかな証拠である。同様のことは、宗教改革が始まって以来、異端、偶像崇拜、迷信的行為、背教、あるいは他のあらゆる悪名高く恥ずべき罪から回復した人々を何度も受け入れてきた正統な改革された諸教会についても記されている。それゆえ無から〔キリスト教の〕信仰への悔い改めや回復の過程を止めることは、キリスト教の規則の特殊な一支流なのである。<sup>(37)</sup>

上記の言葉は、古代の教会の姿勢が国教会へと受け継がれていることを示すものである。改宗者を受け入れることは古代から実践されてきた正しい行いであり、その実践を行う諸教会は古の慣習に従う正統な教会なのである。この言を発した説教者ゴージは国教会に属してはいたが長老派であったために、国教会のみを正統な教会とはせず改革された諸教会があらゆる宗教・教派からの改宗を快く受け入れてきたとするが、この改革された教会がイギリスにおいて国教会を指していることは以下の言葉から読み取りうる。

彼は、イギリス国内には古代から受け継がれた悔い改めを否定する者たちがいるとして、以下のように指摘する。

最も誇らしげに、また不愉快にも彼らは、まるで彼らが世界中でじつに最も純粋で、さよ



う、唯一の純粋な者たちであるかのように、自らを……ピューリタンと呼ぶのである。しかしながら彼らはほとんど純粋ではないのであり、罪が取り除かれる悔い改めを否定している。彼らの極端な厳格さ、あるいは残酷さは、御言葉においてご自身の自発的で豊かな恩寵が悔悟者に与えられたことによって、そうした者たちを受け入れる人々に与えられた指示によって、またそうした者たちを招き入れる人々の不断の過程……によって示される、我らの恵み深く憐れみ深い父なる神の御心に真っ向から反しているのである。<sup>(38)</sup>

しかし、ここで注意しなくてはならないのは、ゴージ自身も現在ではピューリタンと形容されることである<sup>(39)</sup>。なぜこのような、自己矛盾にも見える表現が生じたのであろうか。この問いに答え、上記の描写を読み解くためには、当時の数多いキリスト教諸教派と国教会の関係を明らかにしておく必要がある。

17 世紀に入ってイギリス国教会から分離した主な教派として、バプテスト諸派、独立派、クエーカーが挙げられる。このうちバプテスト派は 2 派に大別される。アムステルダムに亡命中に自らに洗礼を施したジョン・スミスの追隨者たちから生じ普遍救済説を採用したジェネラル・バプテスト派、1630 年代にスミスと同様に幼児洗礼を否定したヘンリー・ジェイコブに率いられた分離派の一部であるカルヴァン主義的な救済説を採るパティキュラー・バプテスト派である。このうちパティキュラー・バプテスト派の一部は独立派<sup>(40)</sup>となる。加えて 1630 年代前後には分離諸派の多様化が著しく進んだ。ジェネラル・バプテスト派は 1625 年頃までに 150 前後の分派に分れ、ジェイコブに従う分離派は 1642 年までに 8 の分派を有しており、とりわけパティキュラー・バプテスト派は 1660 年までに 250 以上の派に分裂していた<sup>(41)</sup>。分離派たちは数多くの分派を有してはいたものの、全体としての人数は非常に少なかった。分離派が特に集中したロンドンにおいても同地域への影響力は取るに足らないものであったとされる<sup>(42)</sup>。だが、分離派諸派は程度の差はあれ国教会の礼拝に出席することを拒否する点において体制側からは危険視された。というのもエリザベス 1 世が国王を「至高の統治者 (The Supreme Governor)」<sup>(43)</sup>と称して以来、国王は国家と教会の上に、より明確に言えば国王の統治下に教会と国家は同等の地位に置かれており、国教会を否定することは国家や王を否定することに結び付いたためである。例えば 1605 年、ジェイコブは国教会から分離した諸教派が教区の輪を超えて礼拝のための集会を持ち、国教会と別の教会組織を獲得できるよう国王に嘆願した。この時ジェイコブによって構想された教会は、イギリス国内に存在したヨーロッパ諸国の教会のように、国教会とは穏やかな交流を継続するものであり国王の権威への否定を含むこともなかった。ジェイコブによる教会が特殊であったのは、この教会の会員資格が自発的に教会員となった宗教的知識に通じた人々に限られ、かつそれらの教会員は国教会の教区に所属しなかったという点である。彼が教会員資格を狭めた理由の一つは、正しい教会が王として戴くのはイエスのみであり、そこに相応しいのは十分に宗教的知識を得た人々でなければならないと考えたためである。以上のような性質を総合すると、ジェイコブによる教会は国教会を正しい教会としては認めなかったものの、教会の統治者としての国王の権威を否定してはいなかったことになる。国王の権威を否定しないとはいえ、この教会の教会員が国教会の礼拝に出席しない<sup>(44)</sup>以上、国家体制側から見ればこの教会は、国家によって統制できない集団でしかなかった。

このことを踏まえれば、上記の引用においてピューリタンの語によって指し示されるのは、イスラームからの再改宗者を受け入れた国教会と国教会に属しつつ内部から改革を求

めたゴージ自身を含めた穏健なピューリタンではなく、より純粋な教会の構築を目指して国教会から積極的に分離を試みた諸教派であると言えよう。既に述べたように、この説教が行われた 1630 年代は分離派諸派が分裂を繰り返した時代であり、説教において具体的にどの教派が批判の対象とされたのかを知ることは困難である。そのため本稿においては再改宗者の受け入れに対する姿勢をめぐって非国教会諸教派が批判の対象となり、原始教会の伝統を受け継ぐ国教会の正統性と普遍性が主張されたということにのみ注目しておきたい。

以上を踏まえて、改めて本項で取り扱った描写において国教会と非国教会諸教派とイスラームがいかに関連付けられているのかを整理しておこう。まず、再改宗者に相対する際の姿勢において国教会と一部のピューリタンが比較されることによって、いかなる方向性の改宗者をも教会に受け入れるという古代の教会の習慣を受け継ぐ国教会の地位が高められた。それと同時にイスラームやユダヤ教、その他の異教と再洗礼派やローマ・カトリックといったキリスト教諸教派は、正統な教会に改宗するべきあるいはそこから正統な信仰に立ち返る可能性のある宗教として同列に記述されたのである。

#### 4. おわりに

本稿では、17 世紀イギリスにおけるイスラームとの接点の一つであるバルバリア海賊と海賊による捕虜の改宗と再改宗の問題を通して、キリスト教と等置されうる一宗教としてのイスラームがいかなる理由から立ち現れたのかを考察することを目的としてきた。

バルバリア海賊による襲撃を通じたイスラームとの出会い、また海賊によるイギリス人捕虜のイスラームへの改宗の問題の表面化は、軍事的脅威としてのみでなく宗教的脅威としてのイスラームの存在をイギリスの人々に意識させることとなった。17 世紀前半にはイスラームへと改宗したイギリス人捕虜が国教会聖職者に再改宗を申し出る事態も発生し、再改宗を受け入れる場において国教会聖職者たちによってイスラームに批判的に言及した説教も行われた。説教において挙げられるイスラームに対する批判は、その多くがキリスト教徒による典型的なイスラーム蔑視に沿うものである。しかしイスラームに対する批判と共に現れるピューリタンやローマ・カトリックへの言及、原始教会と国教会の同一視からは、本稿における問いへの結論を導き出す糸口を見出さう。

ローマ・カトリックに対する反キリストの呼称がイスラームへの呼称へと転換されたことから、大陸的プロテスタントとローマ・カトリックのヴィア・メディアという精神を掲げ自らの教会の普遍性を追求するためにローマ・カトリック的要素をも完全には排除しきれない国教会の微妙な立場を窺い知ることができる。イスラームからの再改宗者受け入れに際して、どのような宗教・教派からの改宗者も受け入れてきた原始教会に沿う国教会の方針に反するピューリタンへの批判からは、原始教会の伝統を受け継ぐ国教会の正統性と普遍性の強調が見出される。加えて、改宗者への態度に関する原始教会から当時の正統な教会と国教会の共通性を提示する文言からは、教会が改宗者を受け入れる対象の宗教としてイスラームとローマ・カトリックや再洗礼派、ユダヤ教といった非キリスト教・キリスト教諸教派が並列される。すなわち、近世イギリスにおいてイスラームは一方では非国教会諸教派と並列されることで同時代における正統な教会としての国教会の地盤を確固たるものとするために利用され、他方では非国教会諸教派・宗教と等置されることによって一部のキリスト教と同等の地位をもつ一宗教として認知されることになったと言えよう。冒頭で述べた

ように本論において扱った再改宗とそれにまつわる言説は、当時のイギリスのイスラームとの接触の一部において生じた出来事にすぎない。そのため再改宗の場において提示された上記の言説とその分析のみをもって、一宗教としてのイスラームが立ち現れた原因であると断じることとはできない。しかしながら、大陸的プロテスタントとローマ・カトリックのみならず国内における多様なキリスト教諸教派にも囲まれつつ自らの教会の正統性の主張と立場の確立を試みた国教会による上記のような構造の言説がイスラームの地位をキリスト教に接近させた一要素である可能性を示唆することはできよう。

## 付記

本稿は日本宗教学会第 79 回学術大会において「近世イギリスにおけるイスラームへの言説—捕虜と再改宗を例に—」と題して行った個人発表に基づき、原稿化したものである。

## 註

- (1) Jo-Ann Ezra, “Diplomacy, Piracy and Commerce: Christian-Muslim Relations between North Africa, the Ottoman Empire and Britain c.1580-1685”, David Thomas and John Chesworth (eds.), *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History Volume 8. Northern and Eastern Europe (1600-1700)*, Leiden; Boston, Brill, 2016, p. 28.
- (2) 那須敬『イギリス革命と変容する〈宗教〉——異端論争の政治文化史——』岩波書店, 2019 年, 171 頁。
- (3) 那須, 前掲書, 170 頁。
- (4) 17 世紀にはイスラームは多くの場合、ムハンマドの名にちなんだ呼称で呼ばれた。この理由について同時代の外交官ポール・ライコートは、トルコ人たちの法が修道士セルギウスの助けを借りてマホメットによって編集されたためにマホメタニズムと名付けられたと述べる (Paul Rycout, *The Present State of the Ottoman Empire. Containing the Maxims of the Turkish Politie, the most material Points of the Mahometan Religion, Their Sects and Heresies, their Convents and Religious Votaries. Their Military Discipline, With an exact Computation of their Forces both by Land and Sea*, London, 1668, pp. 97-98)。
- (5) 那須, 前掲書, 205 頁。
- (6) David Thomas and John Chesworth (eds.), *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History Volume 8. Northern and Eastern Europe (1600-1700)*, Leiden; Boston, Brill, 2016, p. 313.
- (7) 那須, 前掲書, 207 頁。
- (8) David Thomas and John Chesworth (eds.), *op. cit.*, p. 313. ロスは「このマホメタニズムという教派はキリスト教とユダヤ教と異教から構成される (This Sect of Mahometanism is so made up of Christianity, Judaism, and Gentilism……)」と述べる (Alexander Ross, *Pansebeia: or, A View of All the Religions in the World: With the Severall Church-Governments, From the Creation, to These Times; Also, a Discovery of All Known Heresies in All Ages and Places*, London, 1658, p. 179,

初版は 1653 年であるが、本論文では 1658 年出版の第 3 版を用いた)。なお、ロスの表記に従えば「マフメタニズム」ではあるが、他の著作者の表記に合わせて「マホメタニズム」と表記する。

- (9) Ross, *op. cit.*, p. 162.

Quest. What are the two prevalent Religions this day in Europe?

A. Mahumetanism and Christianity.

- (10) ジェームズ 1 世の時代には、海賊行為は必ずしもムスリムによるものではなかった。政府が個人に対して、特定の船舶の拿捕を私拿捕として海賊行為とは区別して認める許可証である異国船拿捕免許状が発行されたことによって、イギリス人によるイスラム船の拿捕や、イギリス人によってムスリムが捕虜とされる事態も増加していた。イギリスの海賊は北アフリカ諸国の海賊たちと手を組み、地中海を航海する貿易船やオスマン帝国の船を襲いもした。
- (11) Jo-Ann Ezra, *op. cit.*, p. 22. Nabil Matar, *Islam in Britain 1558-1685*, New York, Cambridge University Press, 1998, p. 6.
- (12) 薩摩真介『〈海賊〉の大英帝国——略奪と交易の四百年史——』講談社、2018 年、74 頁。
- (13) 政府の下には捕虜解放のための身代金出資を願う家族たちの声が継続的に届けられた。1640 年にはアルジェのイギリス人捕虜たちの買い戻しの監督を担当する委員が議会によって任命され、その翌年には「トルコ人、ムーア人、その他の海賊による捕虜の救援のための条例 (An Act for the reliefe of the Captives taken by Turkish Moorish and other Pirates)」が成立した。1643 年には「アルジェにおける捕虜の救援のためになされるべき寄付金のための法令 (Ordinance for Collection to be made for relief of Captives in Algiers)」が、1644 年には「アルジェにおける捕虜の買い戻しのための法令 (Ordinance for Redemption of the Captives in Algiers)」が制定された。さらにこの翌年には「苦境にある捕虜たちの買い戻しのための金を集めるための法令 (An Ordinance for the raising of Moneys for the Redemption of distressed Captives)」が成立する。
- (14) スタンリー・レーン・プール (前嶋信次訳)『バルバリア海賊盛衰記——イスラム対ヨーロッパ大海戦史——』リブロポート、1981 年、229-239 頁。
- (15) William Gouge, *A Recovery from Apostacy. A Sermon Preached in Stepny Church neere London at the receiving of a Penitent Renegado into the Church, Octob. 21. 1638. By William Gouge D. D. and min. in Bleak-Friers London Herein is the history of the surprizall and admirable escape of the said penitent*, 1639, pp. 2-3. 原文でのイタリックに傍点を付した (以下同様)。引用中の〔〕内は本論文執筆者による補足である (以下同様)。

In this voyage they were set upon by Turkish pirats, and after a dangerous sight, wherein seven were slaine and about twenty more wounded and maimed, hee with three and thirty more were carried to *Argier*, where, within foure daies after their arrivall, they were sold for slaves in the Market place. Of that company many died, foure were ransom'd, and seven there still abide in slaverie. It is a custome there that their King have his choice of every eighth person to bee sold.

And it so fell out that this man was one of the eight. The King therefore had him for his slave, and after two moneths passed him over to his brother; by whom hee was sold to a *Negro*. That *Negro* used him most cruelly: and by daily threatnings and soare beatings forced him to renounce his Christian Religion, denie *Christ*, acknowledge *Mahomet* to bee a great *Prophet*, and in testimony thereof to bee circumcised and to conforme himselfe to the *Turkish* rites, and attire. All these things thus accomplished, the *Negro* sold him to a *Grecian*, who was also a *Mahometan*.

- (16) サレでは、奴隷たちが監禁された小さな地下牢は膝まで水につかるほど地下深く掘られており、夏には高い湿度でカビが生え、冬には雨が吹き込んでくる堅穴のような場所であったと描写される（ジャイルズ・ミルトン（仙名紀訳）『奴隷になったイギリス人の物語——イスラムに囚われた 100 万人の白人奴隷——』アスペクト、2006 年、96-97 頁）。
- (17) アルジェに拘留された捕虜たちの解放のために、ローマ・カトリックの修道会が独自に活動していた。12 世紀に設立されて以降、パリからインドに至るまで広範囲に修道院を持ち、非キリスト教国で不自由な生活を送る捕虜や奴隷を買い戻すために働いた「聖なる三位一体と、捕虜たちの身請け教団」は 1630 年代のアルジェにも訪れた。彼らの働きによって多くのフランス人捕虜が解放されたが、その救いの手が差し伸べられるのはフランス人のカトリック教徒に限定されていた（プール、前掲書、240, 241, 245 頁）。
- (18) 白い衣と杖を持つという形式は、ローマ・カトリック教会において悔悛者が課せられた装いを踏襲していると指摘されている（Matar, *op. cit.*, pp. 69-70）。
- (19) Matar, *op. cit.*, p. 70.
- (20) 教会や聖職者にイスラームへの改宗の事実を申告することなく教会に戻ることは以下で論じる説教においても、常に憂慮されている。
- (21) Gerald Maclean and Nabil Matar, *Britain and the Islamic World, 1558-1713*, Oxford, Oxford University Press, 2011, p. 127.
- (22) *Ibid.*, pp. 130-131.
- (23) *Ibid.*, p. 129.
- (24) Edward Kellet, “Remember therefore from whence thou art fallen, and repent, and doe thy first works.”, *A Retvrne from Argier. A Sermon Preached at Minhead in the County of Somerset the 16 of March, 1627. at the re-admission of a relapsed Christian into our Chvrch*, 1628, London, p. 20.  
*Mahomet* (I say) the *Rauisher* of his Mistress, the known *Adulterer* with one *Zeid*, ……
- (25) ムハンマドとザイナブの結婚に対してはメディナの人々から非難された。その理由は姦通ではなく、養子であるザイドを実子とみなした上での近親相姦であるというものであった。（モンゴメリー・ワット（牧野信也、久保儀明訳）『ムハンマド——預言者と政治家——』みすず書房、1970 年、186 頁）。
- (26) Kellet, *op. cit.*, p. 32.  
Cause there was, and good cause, for the Iew and the Christian, of those times,

to professe their Religion, by their very Apparell. But the Turkish Turbant was nastie in the cause, sencelesse in the vse.

(27) *Ibid.*.

(28) Gouge, *op. cit.*, p. 12.

……when he yeelded to be circumcised, and have all his haire shaved off, and to put on Turkish attire, and when he professed himselfe a *Mahometan*, then *He was lost*.

(29) Henry Byam, “If yee be circumcised, Christ shall profit you nothing.”, *A Retvrne from Argier. A Sermon Preached at Minhead in the County of Somerset the 16 of March, 1627. at the re-admission of a relapsed Christian into our Chvrch*, 1628, London, p. 64.

……shall haue a merry madd world, and shall neuer make an end of eating, drinking, and *colling wenches*.

(30) *Ibid.*.

……is a tast of his infernall doctrine, of those strange lyes and strong delusions with which he hath bewitched the world, and led men-hood-wink’t into the Abisse of perdition.

(31) 16 世紀のカルヴァン主義神学者。

(32) Byam, *op. cit.*, p. 65.

But if Turke and Pope together cannot make vp that one Antichrist, and hee may not be both of these, nor yet a third out of both these. I add, nor a third besides these. I should rather probably conclude with learned *Zanchius and others more. The Turke is he*. The Turke is he who though he professe himselfe the Prophet of God, yet exalteth himselfe against all that is called God, and doth most blasphemously deny God, neither acknowledging the Trinitie, nor that holy One, the power of God.

(33) 日本聖書協会『聖書 新共同訳』日本聖書協会, 2013 年, ヨハネの手紙 2. 22。

(34) 現実には地域毎の言語で礼拝が行われることが黙認されていたため, この批判は正確ではなかった。

(35) この語は多くの場合「中道」と訳されているが, 仏教における中道との混同を避けるために本論文では塚田による訳語を採用した (塚田理『イングランドの宗教——アングリカニズムの歴史とその特質——』教文館, 2004 年 (新装版 2006 年), 3 頁)。

(36) Gouge, *op. cit.*, pp. 19-20.

From those primitive times of the Christian Church even to these our dayes, they who after their revolt from the Faith, have beene thorowly touched in conscience for their sinne, have not unwillingly made recantations, and confessions, and undergone what the Church thought meet to lay upon them. This time after time hath beene done in all reformed Churches: And that not onely by such as have returned from *Paganisme, Turcisme*, and *Iudaisme*, but also from *Anabaptisme* and *Popery*.

(37) *Ibid.*, p. 79. (原文中の改行は削除した)

We have before shewed how the Church of old had daies, and places, and rites, and Ministers for admitting penitents after their Apostacy into the Church: which gives an evident demonstration of her willingnesse and readinesse to entertaine such. The like might be noted of the Orthodox reformed Churches, which ever since the beginning of the Reformation have time after time received such as have turned from their Heresie, Idolatry, Superstition, Apostacy, or any other notorious and scandalous offence. For it is an especiall branch of Christian discipline, to stop the course of repenting and returning to the faith from none.

(38) *Ibid.*, p. 80.

Most proudly and odiously they stiled themselves……Puritans, as if they had beene forsooth the purest in the world, yea and they onely the pure ones: whereas they are of all the most impure: denying repentance whereby sinnes are purged away. Their extreme severity, or rather cruelty, being directly contrary to the minde of God, our gracious and mercifull Father, manifested in his Word by his owne free and rich grace offered to penitents, by the directions given to his people to receive such, and by their constant course in entertaining such……

(39) 現在では、ゴージは「模範的ピューリタン」と形容される (Brett Usher, “Gouge, William”, *Oxford Dictionary of National Biography*; Oxford, 2008.1.3 更新。

<https://doi.org/10.1093/ref:odnb/11133> (2019.10.8 最終閲覧)。

(40) 本節で言及するのは宗教的独立派であって、政治思想的独立派とは異なる。

(41) S. ギリー, W. J. シールズ編 (赤江雄一ほか訳)『イギリス宗教史——前ローマ時代から現代まで——』法政大学出版局, 2014 年, 237-238 頁。

(42) 同上。

(43) 塚田, 前掲書, 59 頁。

(44) 初期においては教会員が国教会の教区礼拝に出席するのも、国教会聖職者の説教を聞くことも国教会への恭順を示し良好な関係を築くために義務とされていたが、教会員が増え教会の規模が拡大するに従って、国教会との交わりは個人の裁量によるところとなった (M. トルミー (大西晴樹・浜林正夫訳)『ピューリタン革命の担い手たち——ロンドンの分離教会, 1616-1649——』ヨルダン社, 1983 年, 41 頁)。

Views on Islam and Non-Anglican Sects in Early Modern Britain:  
The Conversion of English Captives and Their Reconversion  
to the Church of England

Yuka KAWASOKO

The encounter with Islam in early modern Britain was not limited in the realm of trade and diplomacy. It consisted of diverse aspects as studies of Arabic began to be stimulated in the country. This paper focuses on encounters with the Barbary pirates infested along the coast of North Africa, the conversion to Islam by English captives, and their reconversion to Christianity. In the first half of the seventeenth century, some captives confessed their apostasy in captivity and desired readmission to the Anglican Church. When the Church accepted their conversion, though sermons critically referring to Islam had been preached in the service, they did not just denounce the Islamic religion. These discourses express the similarities between Anglicanism and the Primitive Church in receiving the converts and the ambivalent attitude of Anglicans toward the Roman Catholics. Notably, both Islam and the non-Anglican sects were similar subjects from which the Anglican Church should accept converts. This parallel could suggest that Islam began to acquire its position as a religion equivalent to Christianity in defining the authenticity of Anglicanism.